

---

# 異世界へGO!!

緋剣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界へGO!!

### 【Nコード】

N7759I

### 【作者名】

緋剣

### 【あらすじ】

ごく普通の高校2年生月城 空は気がついたら異世界に飛ばされていた。

その世界で出会った仲間たちと共に旅をするうちに、空は戦いにまきこまれていく(予定です)

## プロローグ（前書き）

初めてなので読みにくいと思いますが読んで頂けたら嬉しいです。

## プロローグ

気が付くと俺は倒れていた。起きて辺りを見渡すが目に入ってくるものは木々ばかりで他に何も見当たらない。いや、空も見えるけど太陽が二つあるのはどうなんだろう？

「はあ、あれはマジだったのか？」

おれはため息をつくと先ほどまでの光景を頭に浮かべた。

俺こと月城 空は私立光陰学園高校の2年生である。成績は中の上、運動は上の上、

容姿は友人いわく中の上か上の下らしい。(なんか微妙じゃね?)  
親は居るが一人暮らしという、そこそそ楽な生活だ。まあ、自己紹介はこのくらいで、、、

その日はいつもと変わらず、学校帰りに俺のお気に入りの場所である星降りの丘で昼寝をしようと

していた。が、いきなり辺りが暗くなったので目を開けると俺はなぜか落とし穴のようなものに

落ちかけていた。(つーか、動いてもいないのになぜ落ちる?)  
などと考えつつも脱出を

試みたがすでに足場が完全になくなっていたためあえなく失敗、あとは体を重力におまかせするしか

なかった。、、、(ああ、終わったなこりゃ)、、、10秒、  
、20秒、、、(いやいや、どこまで落ちてんだよ俺)

『はい、どうもこんにちわ』

「は？」

いきなり話しかけられ、目を開けると今どきの大学生っぽいヤツがいた。

「誰だ、おm」僕一応神って仕事してるんだけどさ、さっきあの場所であつたんだよね。で、キミはあの世界ではもう生活できないんだ、

うん。」

(じゃあ俺は死んだのか？、いやでもまだ意識あるしjkvf c j h v b d )

『でもまだ死にたくないだろうから、他の世界にとばすね、よし決定！』

「おい、ちよつと待て」じゃ、元気でね」って、うわああああああああ

俺、まともじゃべってないのに、、、、、、

## プロローグ（後書き）

できれば感想などお願いします。

## 第1話 〽️遭遇〽️(前書き)

一回間違えて消してしまいました。結構ショックです。

## 第1話

### ～遭遇～

こんにちは、月城空です。いきなりですがピンチです。

目の前には体長1メートルを超える狼がいます。

森から出ようと歩いていると、横の茂みから現れました。

こちらをめちやくちや睨んでいます。ピンチです。重要なことなので2回言いました。

俺に与えられた選択肢は

- 1・逃げる
- 2・一応戦ってみる
- 3・おとなしくやられる
- 4・マジ逃げる
- 5・話し合う

(よしまず状況を見てみよう。3と5はまず嫌だな。武器なりそんなものも持っていないから

2は無理っぽいし、、よし1か4にしよう。ってことで)

俺は狼に背を向けると全力で走り出した。

数分後、後ろから狼が追ってこないのを確認すると俺はその場に座り込んだ。

幸いアイツの足は遅く追いつかれなかったが、とても疲れた。

いくら運動が得意でも疲れるものは疲れるのである。

「ふう」

俺は一息つくと背負っていたかばんからペットボトルを取り出し一気に飲み干した。

何も無いよりはと、かばんを持ったまま歩いていたのは正解だったらしい。



ちなみにかばんの中身は  
ペットボトル(たつたいま空になった) カ○リーメイト(チョコ  
レート味)  
携帯電話 ペン数本 財布(3275円) 真っ白な本  
ある。

(さてよ、俺本なんか持ってたか?)  
気になった俺は本を手にとって見るが、表紙には何も書かれていな  
い。

(、、、っ！ まさかこれは魔法のほっはいどうも〜 突然です  
が神です。

説明し忘れてたけどその本はこの世界の基礎知識大全集ってところだ  
から、

特別な力とかは使えないんだよね、うん。でも言葉は通じるように  
したから安心していいよ。』

「おいコラ、人の思考に横入りすっらふう、危うく完全に忘れると  
ころだったよ〜。

僕が思い出してよかったね、キミ。っていうことで今度こそじゃあ  
ね〜 』

(クソッ、アイツめ。次こそは勝ってやる)  
変な誓いをする俺であった。

数時間後、今度は何かに出会わないように注意しながら歩いている

と遠くのほうから  
馬の嘶きのような音が聞こえてきた。森の出口は近いと判断した俺  
はテンションが  
上がり先を急いだ。

しばらくすると、目の前に1本の道が見えてきた。道に出た俺が左  
右を見渡すと

左のほうから馬に乗った1人の男が歩いてくるのが見えた。むこう  
も俺に気づいたらしく

馬を近付けてきた。

「おい坊主、こんなところで何やってんだ？仲間も居ねえみたいだ  
し、武器の類も

もってねえようだし。」

(ここで下手に異世界やら神やら話すのはよくないな。ならば)

「えーっと、実は道に迷ってしまったって途方にくれているんです。す  
みませんが

ここがどこで、近い町へはどのくらいかかるか教えてくれませんか  
?。」

「なんだそうなのか、だったら隣の町まで連れてってやるよ。」

「ありがとうございます。でもいいんですか?。」

「気にすんな、ちよつど話し相手がほしかったとこだからな。」

こつして俺は、近くの町まで連れてってもらつことになった。

第1話 〱 遭遇〱 (後書き)

思ったよりも話が進みません、、、。

次話はこの世界についての説明を書きたいと思っています。(話は進みません)

EX1 〱世界観〱(前書き)

今回は要するに説明です。

めんどくさい人はとばしてくれて構いません。

## 地理

この世界はデリエールと呼ばれていて、空がとばされてきたのはラント大陸。

この大陸は四国を約30倍にした大きさで4つの国があり  
名前はイデアール クラフト ラーデン プリヒト  
国の広さの比は1:5:2:2くらい

まだ銃も開発されていないが、魔法と組み合わせた独自のものも多数ある。

## イデアール

大陸の北東（右上）に位置する神聖国家。（地図はこの世界と同じで上が北です）

北と東は海に、南は魔の森に、西はシュネ山脈に囲まれているため他の国の人からは秘境などと呼ばれることもある。

## クラフト

大陸の中央から南東（右下）にかけて位置する大陸最大の国。兵力が強く

他の国をどんどん侵略していった。現在は一時小康状態にあるが、いつ動き始めるかわからない。

## ラーデン

大陸の南西（左下）に位置する商業国家。商業国家なので経済力では他の国を

圧倒している。ただし郊外での治安はよくない。

プリヒト

大陸の北東（左上）に位置する民主国家。とても豊かな国で国力もある。

実は他の国より約5年いろいろな技術が進んでいる。

魔法

ゲームとかで出てくるアレ。

属性魔法

特殊魔法

召喚魔法

古代魔法

精霊魔法の

5種類ある

魔力量は人それぞれで基本寝ると回復する。魔力を使い果たすと動けなくなる

下手に使いすぎると死ぬ。

属性魔法

火、水、土、風、雷、の基本5種類と光、闇の上級2種類。上級のほうが

当たり前だが強い（威力は約3倍）

肉体強化や防御呪文も含まれる

ほとんどの人がつかえる

基本の魔法は混ぜることができる

## 特殊魔法

回復呪文や瞬間移動など

ごく稀に時間や空間を操れる人もいる  
得意不得意の差がとても大きい

## 召喚魔法

魔獣などを召喚して操る

術者の力にあったレベルまでしか召喚できない

## 古代魔法

はるか昔に存在していたとされるが、詳しいことは分かっていない  
しかし使える人はいるらしい

他の魔法と比べると威力が段違いらしい

## 精霊魔法

自然の精霊の力を借りて行う

精霊が認める人にしか使えないため使える人が少ない

## マジックアイテム

魔法を応用して作られた道具

日用品から武器まで種類が豊富にある

スペルを唱えると効果を発揮する

お金

銅貨、銀貨、金貨、金塊、宝貨の5種類

銅貨 ≪ 50円

銀貨 ≪ 1000円

金貨 ≪ 500000円

金塊 ≪ 100万円

宝貨 ≪ 1億円



EX 1      〈世界観〉（後書き）

細かいところはまた本文で書くつもりです  
次はしっかりと話を進めます

第2話 〓町へ〓(前書き)

思っていたより更新が遅れてしまいました、、

## 第2話

### く町へく

あれから2日経ったが俺たちはまだ町についていなかった。

「まだ着かないのかよ、もう2日だぜ。」

「あと1日だから我慢しろ、我慢。」

一緒に行動しているのはあの馬に乗っていた男である。

名前はガルゴ、行商人をやっているいろいろな知識を持っている。

結構大雑把な性格らしく、俺が遠くからやってきて金が

ないことを話すと貸しなどと言って金貨2枚(10万円)をくれた。

他にもあの本に載っていないようなことを教えてくれた。

中でも1番助かったのは戦い方について教えてくれた

ことである。この世界では商人でさえもある程度の力がないと

やっていけないらしく、戦えない者は仕事につくことは

ほぼ不可能らしい。そのため俺はガルゴに基本的な体術、剣術、

魔法を教わった。魔法については危険だと言ってあまり教えて

くれなかったが、基本の魔法くらいなら使えるようになった。

ついでにガルゴが持っている武器の中から1つくれるというので

俺は刀身が1メートルほどの刀を選んだ。やっぱり日本人なら

刀だよな。この世界の武器はいつもはアクセサリとして身に着け

ておき

いざ戦いになったらスペルを唱えて武器化させるらしい。

マジックアイテムの便利さを実感する俺だった。

ちなみにガラゴはいくらでも荷物が入る4次元ポケットのようなア

イテムを

持っていた。、、、さすが商人だ。

「アウセン」

ガルゴがスペルを唱え4次元ポケットもどきからテントを取り出した。

「よし今日はここで泊まるぞ。」

「はいよつと。」

俺にとっては人生で2回目となる野宿だが行商人であるガルゴにとっては

あたりまえのようできてきばきと仕度をしている。暇になった俺は

「ちよつと動いてくる。」

と言って少しはなれたところで刀を振ることにした。

ブンツーーーブンツーーー

(昨日よりだいぶ慣れたな)

もともと運動神経がよかつたせいかほとんど思うがままに刀が

振れるようになり上機嫌になった俺はガルゴが夕飯を知らせるまで刀を振り続けていた。

翌日の昼過ぎ、ようやく目的の町が見えてきた。

町に着くとガルゴはまず宿をとるぞ言っ  
て歩き出した。町は思っていたより  
も広くとてもにぎやかだった。

どの宿も混んでいて空いている宿  
を見つける頃にはもうあたりは暗  
くなっていた。そのため町の探検は  
明日にし今日は寝ることにした。  
やはりベットは寝心地がよかつた。

### 第3話 〱買い物〱（前書き）

書き忘れていましたが、時間や距離の単位は同じとします。  
そのほうが分かりやすいので

### 第3話

#### く買い物く

翌朝、朝食を終えた俺にガルゴがいいものを見せてやると言っただけのポケットから15センチほどの大きさの水晶球を取り出した。

「なんだこれは？」

「これは魔力量をはかるアイテムだ。まだお前の魔力量をはかってなかったからな。」

「で、どうすりゃいいんだ？」

「ああ、その球の上に手をのせるだけだ。」

「分かった。」

俺が球に手をのせると、透明だった球の色が変わりはじめた。

最初は赤、次は黄色、そして青くなつた後にまた透明に戻った。

「ふうくむ、なるほどなるほど。」

「おい、結果はどうなんだ？」

「まあ結果から言うと、お前の魔力量は大体1000だ。」

「いや1000って言われても分かんないんだけど。」

「普通の奴の魔力量は平均すると100くらいだから、

お前は普通の奴らの10倍の魔力量を持っているってことだ。」

「10倍!?俺って超ラッキーじゃん。」

「まあそうだな。でも変なことに使つなよ。」

「使わねーって。じゃあちよっくらでかけてくるわ。」

そう言っただけ俺は宿を出たのだった。

食べ物などを買い食いしながら歩いていると通りの奥にマジックアイテムを売っている店があるのを見つけた。

（マジックアイテムか、、、面白そうだな）

俺は迷わずその店に入ってしまった。

店内は思っていたよりも広く綺麗だった。客もそこそこ入っているようだった。俺がきよろきよろしていると店員らしきおっさんが

「何かお探ですか？」と聞いてきた。俺が素直に

「いえ、何かを探してるわけでは。ただこういう店に来るのは初めてで。」と言うと

「では、この店にあるマジックアイテムについて

説明をいたしますね。まず1階には日用品系のアイテムが  
おいてあります。c j h b v k n a v j n v v j b v f d k v n k  
j、、、、」

店員はいろいろ説明してくれたが俺は結局ガルゴが持っていた

4次元ポケットもどきだけを買うことにした。そして帰ろうとしたが

「つぎは2階です。2階には武具がおります。」

（武具か、刀1振りだけじゃ心もとないからな。見ておこう）

2階に上がるとがたいのいい男達がそれぞれの武器を眺めていた。

店員は俺の右手首にあるブレスレットを見て

「お客様はもう武器を持っているようですが、鎧などは持っていないのですか？」



「いや、持ってないです。」

「では、ご案内します。」

どこまでもマイペースな店員であった。

「鎧、レザーアーマー、戦衣の3種類がありますがどれにしますか？」

「戦衣？」

「はい。魔力を練りこんだ糸を使って作られた服で普段着としても鎧としても使える優れたものです。まあ、少し高いですが。」

(戦衣は便利だな。少しくらい高くてもいいか)

「じゃあ戦衣をください。」

「分かりました。追加効果はどうしますか？何も無いものから対魔法防御付きの物までありますが。」

「弱めの対魔法防御の効果を持った物ってありますか？」

「ありますよ。ではこちらになります。ところで他の武器は要りますか。ただし武器のマジックアイテムは3つまでしか持てませんよ。」

「えっ、そんなんですか？」

「ええ、それ以上持つと武器の暴走の原因になります。なので、武器は慎重に選んでくださいね。」

(まじかよ)。ガルゴの奴先にこういう事教えるよな、町の歴史とかより)

「今回はこれでいいにします。武器はまた今度ということ。」

「はい。ありがとうございます。」

俺は店を出てつぎの面白いものをさがそうと歩き出した。

戦衣は銀貨30枚(3万円)と高かったもののいいものが手に入り俺はとても上機嫌だった。



### 第3話

### 〈買い物〉(後書き)

本当はこの続きもつなげて書くつもりでしたが  
予想外に長くなってしまったので次回にまわします

第4話

～喧嘩～

(前書き)

変更点：通常魔法 属性魔法

## 第4話

〜喧嘩〜

しばらく歩いていると遠くのほうからかすかに声が聞こえてきた。

「……………お！」

(なんか穏やかな感じじゃないな)

気になった俺は声のするほうへ駆け出した。

声のもとにたどり着くとそこには2人の(美)少女と3人の男たちが居た。

男たちは3人とも剣を持っていて1人は今にも剣を抜きそうな勢いである。

(普通の剣はマジックアイテムとちがってアクセサリ化できない)男のうちの1人と赤毛の少女が口論をしているようだった。

「おい、嬢ちゃんぶつかったんだから謝るぐらいしろよ。」

「うるさいわね、ぶつかってきたのはあんたの方でしょ。」

「んだとコラ、いい度胸じゃねえか。謝ればゆるしてやってもいいと思っただがもうゆるせねえ。おいお前らこの嬢ちゃんたちに礼儀を教えてやるっぜ。」

男がそう言つと残りの2人もそれに同意するように赤毛の少女を取り囲んだ。

「ふん、やれるもんならやってみなさい。無理だろうっけどね。」

少女がそう言つと男たちは一斉に駆け出した。まず1人目が少女の顔面目掛けて

殴りかかったが少女は体を反らせてあっさりとそれをかわすと、その腕を掴んで

背負い投げのようなことをした。2人目の男は驚いたようで一度距離をおいた。

「ふふ、その程度なの？」

「ちっ！」

挑発された男は少女に殴りかかるが残った一人の男はもう一人の銀髪の

少女のほうへ走り出した。

（おいおい、人質でもとるつもりかよ？しょうがねえなあ）

俺は男と少女の間に割って入り向かってきた男を蹴り飛ばした。

「ぐはっ!？」

男が吹っ飛ぶのを見届けると俺は赤毛の少女のほうを見るがあちらもすでに

戦い終わっていた。

「いや、助かったわ。ありがとね。」

「別にたいした事じゃないですよ。それより大丈夫でしたか？」

「あたし？大丈夫大丈夫、あんな雑魚にはやられないわよ。」

俺が赤毛の少女と話していると銀髪の少女が近づいてきて

「ありがとうございます。この子は喧嘩っばやくて、、

あ、私はソフィアといいます。」

と言ってきたので

「俺はソラっていいいます。」

と自己紹介しておいた。

「あたしはアリアだよ、っとソフィア様 もう集合の時間ですよ!!

急がないとまたアイツに文句言われちゃいます!」

「そうね。ではソラさん、本当にありがとございました。

少しですがこれはお礼ということ。」

ソフィアは袋から青いビー球のようなもの取り出すと

それを俺にくれた。

「じゃーなー、今度会ったらどっちが強いかな勝負しようぜ!。」

そう言っアリアとソフィアは走り去った。

(今度会ったら勝負って、、、)

「はあ」

俺はため息をつくともた歩き出したのだった。

その夜ガルゴが俺にギルド登録を勧めてきた。いくらなんでも俺の生活費やらなんやらをこれからずっと払い続けるには無理があるらしい。身分証もなくまだ若い俺にはギルドに入るのが一番無難に金を稼げるらしい。

「でも、どんくらい金もらえんだ？」

「それは仕事の内容しだいだ。魔獣退治や傭兵の仕事は給料は高いが危険も高い、逆に宅配や農作業の手伝いなどは安全だが給料は安い。」

「ふーん、いろいろあるんだな。」

「まあ、とりあえず登録はしておけ。俺も一応してあるぐらいだしな。」

「分かった。じゃあ明日行ってくる。」

向こうの世界では金はなにもなくても貰えたが、こっちでは自分で働かないと金が入らないという事実には俺は改めて異世界にとばされたんだなあという実感をした。

## 第4話      〽喧嘩〽      (後書き)

ちなみにソフィアは17歳、アリアは15歳です。

マジックアイテムの武器と普通の武器の違いはアクセサリ一化できるかどうかだけです。追加効果があるものもありますが基本的な違いはそれだけです。



第5話      ぐギルドぐ（前書き）

今さらですが空が今居る国はクラフトです。（一番大きい国）

## 第5話

### 〜ギルド〜

翌日俺はギルドにいた。外から見ると事務所みたいだったが中は役所と酒場が混ざったような感じだった。てつきりむさくるしい男ばかりが居ると思っていたが、どう見ても俺より年下の少年や80歳は過ぎていそうなお婆ちゃんなど老若男女勢ぞろいである。俺はしばらくした後奥に受付があるのを見つけた。

「すみません、登録をしたいんですが。」

「はい、登録ですね。ではこの紙に名前などの必要事項をお書きください。」

俺は受付の女の人から用紙を受け取ると内容を書いていった。名前のほかには身長体重や実戦経験の有無などを書く欄があった。

「これでいいですか？」

「はい、結構です。ではソラさん、あなたの能力の値を調べるのでこの黒い石の上に手を置いてください。」

俺が石の上に手を置くと石は鈍く光り熱を発した。

「ありがとうございます、もう離してかまいません。」

「今のは何ですか？」

「これは魔力と身体能力を示すものです。この結果などからソラさんのランクを決めていきます。ランクによって受けられる仕事も

変わります。え〜っと、魔力はAクラスで身体能力もAクラス、でも実戦経験はないから、、、ソラさんはCランクとなります。

「

「Cランク？」

「はい、AからEまでの5種類があるのでソラさんは真ん中くらいです。」

またAランクの中でも特に優秀な人はSランクになることができます。

ちなみに現在Sランクの人は全部で17人です。」

「なるほど、わかりました。」

「では、この腕輪をはめてください。これにいろいろな情報が書き込まれるので絶対になくさないでください。ほかに連絡ツールや

身分証代わりとして使えます。」

「もし無くしたら？」

「……………（ニコッ）」

「…絶対に無くさないようにします。」

「それから2階に行けばチーム登録ができます。しなくてもいいですが

しておく団体での仕事の時に楽ですよ。チームによってはある一定の

ランク以上しか入れてもらえないところもあります。」

「わかりました、ありがとうございます。」

俺は受付の女の人にお礼を言うと2階へ上がった。

2階に上がるとそこでは多くのチームがメンバーを受け付けていた。お祭りの屋台が並んでいるような光景である。見回すといろいろな

チーム名がついている。”砂漠の狼”や”荒海の鮫”など強そうな名前から  
”沼地の豚”や”草原のドジョウ”などなんだかよくわからない名前まである。  
なぜ全て場所の動物で統一されているかは謎である。

俺がしばらく見てみると

「あー！ ソラだっ！！」

と大きな声が出たので振り向くとそこには昨日会ったアリアがいた。

「アリア？ 何でこんなところにいるんだ？」

「ソラこそなんでこんなところにいるの？」

「俺が先に聞いたんだが、まあいいか。俺はどこかのチームに入るうかと

思っ見てまわってたんだ。」

俺がそう言った途端アリアは急に目を輝かせ

「そうなんだ。じゃああたしたちのチームに入りなよ。」

「アリアたちのチーム？」

「そう。」 大空のハヤブサ”っていうチームなんだ」

そう言うとアリアはこっちこっちと俺の腕を引っ張り歩き出すのだ  
った。

第5話      〱ギルド〱（後書き）

次回は新キャラが結構出てきます。（今のところの予定では5人）

第6話

仲間仲間（前書き）

少々強引に進めた感じがいなめなくなっています、

## 第6話

### 仲間

「アリアに連れられていくと”大空のハヤブサ”と書かれた小さな受付があり、そこに身長が2メートルはありそうな赤銅色の髪の男がいた。

「おうアリア、なんだそいつは？」

「こいつが昨日あたしが話していたソラよ。チームを探してるっていうから連れてきたの。」

「ふうん、お前があソラか。で、どうする？」

「俺たちのチームに入るか？」

（知っている人が少しでもいるほうがいいだろうしこの人も悪い人ではなさそうだし）

「えーと、迷惑じゃなければ入らせてもらえると嬉しいです。」

「よし、決まりだな。よろしくソラ。ちなみに俺の名前はシユルクだ。」

「よろしくお願いします。」

「あー俺に敬語は使わんでくれ。なんか気持ち悪いんだ。」

「じゃあ、よろしくシユルク。」

「ぶう、あたしもいるんだけどなあ、、、」

「あ、ごめん。アリアもよろしくね。」

「まあ今回はそれでいいにするわ。でも次からは気をつけてね。」  
そう言って笑うアリアだった。

その後アリアとシユルクが”大空のハヤブサ”のチームについて説明してくれた。このチームは約100人のメンバーで

構成されていて、チームの中でさらに3つの部隊に分けられている

らしい。内容で分けると

鉤爪・・・接近戦は得意だが魔法は苦手な人が多い部隊

翼・・・魔法は得意だが接近戦は苦手な人が多い部隊

嘴・・・魔法か接近戦のどちらかに偏っていない

オールラウンダータイプの人が多い部隊

となるらしい。ちなみにどの部隊に入るかは自分で決めていいらしい。

また各部隊隊長1人と副官4人がいるが、副官は強ければ選ばれるという

ものでもないらしい。そしてシュルクは”鉤爪”の隊長（！）、アリアは

”嘴”の副官の1人らしい。

しばらくの間アリアたちと話していると、向こうから男3人女2人の5人組が近づいてきた。それに気づいたシュルクが

「おい、お前ら帰ってくんの遅すぎだ。」

と不満をたれた。よく見ると5人の中の1人はソフィアだった。

「おや、その方はどなたですか？」

うすい緑色の髪をした男の人が尋ねてきた。

「ああこいつはソラ、昨日アリアが話していたヤツだ。ついさっき



俺たちのチームに入ることになったんだ。お前らも自己紹介してやってくれ。」

シユルクがそう言うとき、さっきの男の人が

「私はハイテンスといいますが、”翼”の隊長をやっています。」

次に隣の深緑の髪の男の人が

「僕はアルベロです、”翼”の副官です。」

今度は真ん中の紺色の髪の男が

「……レインだ、一応”嘴”の隊長をやってる。」

その後ろにいたソフィアが

「改めましてソフィアです、”嘴”の副官をやっています。」

最後に金髪の女の人が

「私はエメリアだ、”鉤爪”の副官を務めている。」と紹介をしてくれた。

俺は全員に挨拶をしつつも、このメンバーの肩書きに冷や汗を流していたのだった。

## 第6話

〜仲間〜（後書き）

次回は登場人物紹介を書きます、話は進みません。

## EX2 〽人物紹介〽 (前書き)

ネタバレになるような内容はあえて伏せてあります。まあ、当たり前ですが

12月11日更新しました

## EX2

### 人物紹介

月城 空

17歳 身長175センチ 魔力量1000

勉強は中の上、運動は上の上、外見は上の下 黒髪黒眼

本編主人公。なんだかんだで異世界にとばされてしまった不運な高校生

だんだんとこの世界になじんできているが、魔法関連についてはまだ驚くことが多い。趣味は推理小説を読むこと

装備：刀、戦衣（魔法耐性 - 10）

ガルゴ

42歳 身長178センチ 魔力量150

ソラがこの世界ではじめて会った人間で、行商人。

気がいい奴でソラにお金や刀をくれたりした。

知識も豊富 がたいのいいおっさん

## レイン

19歳 身長185センチ 魔力量1万  
ギルドチーム”大空のハヤブサ”の”嘴”の隊長  
紺色の髪と眼 口数は少ないがいい人  
スピードはチーム1と言われている  
外見は精悍な感じ

装備：刀×2、戦衣（付与効果付き） 話の中で説明します

## ソフィア

16歳 身長160センチ 魔力量10万  
”嘴”の副官の1人 銀髪碧眼 美人（大和撫子風）  
もともとの魔力量がとて多いらしい  
若いわりにしっかりとしている

装備：刀、弓、戦衣（魔力耐性 - 100）

アリア

15歳 身長153センチ 魔力量500

”嘴”の副官の1人 赤毛で茶色い眼 美人（かわいい感じ）

とても活発で結構気分屋 猫みたいだといわれることも

好戦的な性格でもある

装備：棒、ナイフ、戦衣（強度×2）

シユルク

24歳 身長204センチ 魔力量50

”鉤爪”の隊長 赤銅色の髪に赤眼 バカ力

とにかく元気で猪突猛進タイプ 強化以外の魔法が使えない

外見は熱血野郎

装備：大剣、斧、槍、レザーアーマー

エメリア

23歳 身長162センチ 魔力量120  
”鉤爪”の副官の1人 金髪碧眼 美人（貴族風）  
固い性格 家が超金持ち 計算が得意  
装備：レイピア、盾、鎧

## ハイテンス

27歳 身長176センチ 魔力量15万  
”翼”の隊長 薄い緑色の髪と眼 優男風  
ほぼどんな時でも落ち着いている 精霊魔法が得意  
装備：弓、戦衣（魔力回復効果付き）

## アルベロ

24歳 身長174センチ 魔力量5万  
”翼”の副官の1人 深緑の髪と眼 中性的な顔立ち  
ハイテンスの弟 少し抜けているところがある

装備：魔力砲、レザリアーマー

補足

魔力量は魔法を練習すれば増えます。ただし、人によって限界量や上がり方は違います。

魔力耐性 - 5 というのは、相手が10の魔力を使って魔法を発動させた場合、実際には10 - 5 = 5のダメージしか受けないということです。

魔力砲は自分の魔力そのものをためて打つ武器でためる量は自分で調節できます。ビーム砲に似ているかもしれませんが。

P・S・  
神

自称神 大学生みたいな外見 相手の発言どころか思考にさえ割り込む 今後出てくるかどうかは不明



## EX2 〱人物紹介〱（後書き）

残りの5人も書き終わりました。修正点もあります。  
また主要人物が増えてきたらPART2を書くつもりです。

## 第7話

### く腕試しく（前書き）

登場人物を10人ほど書きましたが、残りの副官だけでも8（？）人もいることを考えると全登場人物数がとても多くなりそうです。

## 第7話

### 腕試し

俺は”大空のハヤブサ”のメンバー（30人ほど）と森に来ていた森というのは最初に俺が落とされたあの森である。なぜこの森に来ているかというと今日は新入りの腕だめし兼部隊分けをするからである。

聞いたところによると俺以外にも最近6人のメンバーが増えたが、まだ部隊に分けられていないので一緒に来ているらしい。

道中俺はアリアと話していた。

「なあアリア、疑問に思ってたんだがチームで1番偉いのは誰なんだ？」

「さあ？あたしも分からないわ。それぞれの部隊長の権限は同じレベルだし、その上に人はいないし。」

「ふーん、じゃああの3人中で誰が1番強いんだ？」

「そうね〜 あの3人が戦ってるのを見たことはないけどあたし的にはレイン様かな？」

ちなみにアリアが様付けでよんでいるのはソフィア、レイン、ハイテンスの3人だけである。

「ハッ！！ そんなわけねえだろ。1番強いのはこの俺に決まっている。」

「おわっ！ シュルク、どっからわいてきたんだよ。」

「そんなことはどうでもいい、とにかく俺が1番だ。」

そう言つて大笑いするシュルクにアリアが

「本当に？ 勝つたことあるのあの2人に？」

「いや、戦つたことすらないぞ。」

「じゃあ何で言い切れるのよ？」

「勘だ、勘！」

「「はあ、、、」「」

その後聞いて回ったところその隊の隊長が強いという人がほとんどで結局真相は分からずじまいだった。

森の中の広く開けた場所に着くとハイテンスが

「では、ここからは部隊に分かれて動いてもらいます。

ただしここからあまり離れたところまでは行かないでください。」  
と言ったあと俺たちの方を向いて

「新しく入ってきた皆さん、これから私たちは部隊別に分かれて魔獣退治をします。皆さんは全ての部隊の中で仕事をしてもらい自分にあつた部隊を見つけてください。ただし無理は禁物ですよ。では10分後に始めます。」

「魔獣か、、大丈夫かなあ？」

俺が心配していると

「大丈夫だと思いますよ、この辺はEランクの魔獣しか出ませんか。ら。」

「君は？」

「僕はシンクと言います。あなたと同じ新入りです。」

「俺はソラ、よろしくな。そうだ、どうせだったら一緒に回らないか？」

「そうですね。じゃあまずどこに行くか考えましょう。」

それから数分間俺とシンクは順番を考えながら話し込むのだった。

P・S・

魔獣にはA〜EとSランクがありEランクの魔獣は魔法を使うこともできないが、Sランクの魔獣はとても強く生半可な攻撃が通用しないばかりか町を消し飛ばせるような魔法を撃ってくることもある。

## 第7話

### 〜腕試し〜（後書き）

前書きで言ってるそばから新キャラ登場です。

ちなみにシンクは茶髪に黒眼と日本人っぽい外見です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7759i/>

---

異世界へGO!!

2011年1月8日23時07分発行